



家森信善著 『ベーシックプラス 金融論 第2版』

岩坪, 加紋

(Citation)

国民経済雑誌, 222(2):73-82

(Issue Date)

2020-08-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0042139>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0042139>



国民経済雑誌

家森信善著

『ベーシックプラス 金融論 第2版』

岩 坪 加 紋

国民経済雑誌 第222巻 第2号 抜刷

2020年8月

神戸大学経済経営学会

書 評

家森信善著

『ベーシックプラス 金融論 第2版』

中央経済社，2019年，256頁

岩 坪 加 綾^a

はじめに

本書は、金融論の伝統的な考え方を踏まえつつも、学生だけではなく生活者も読者層とする金融論の入門書である。

金融論は、どちらかというとなら経済学を修める者や金融実務家などの専門家を対象としてきた。しかし、ここ30年ほどの金融界の変化により、ごく一般的な生活者であっても金融事象に関心を向けざるを得なくなった。本書は、このような関心に積極的に応えようとするものである。

本書の大きな特徴は独特の章構成に表れており、少し遠回りになるが内容の詳細は後にし、まずこの点を強調することから始めたい。

章構成にみる本書の位置付け

金融論の伝統的な内容は、貨幣の機能・役割、信用に関する議論（銀行を筆頭とする金融機関や金融市場などの説明でミクロ経済的記述）、そして金融政策がコアになると考えられる。これらに資金調達・運用（ファイナンス）や国際金融が加わる。また、金融政策がマクロ経済モデルをベースとしているため、全般的にマクロ経済学との重複が多くなる。

こう考えると、ここ30年ほどに出版された教科書は、読者層を考慮した金融政策とマクロ経済的記述の位置づけの違いによって、（独断と偏見を大いに込めて）3つに分類できる（詳細については後段の補論を参照願いたい）。第一の分類は、金融政策の説明を重視し、マクロ経済の記述が各章に広く分布している教科書である（補論の表1）。堀内（1990）が典型例で、ここでは“伝統的な章構成の教科書”と呼ばせていただく。大まかに言えば伝統的な章構成の教科書は大学生以上を読者として想定しており、金融を専門としたい、ないしは

a 摂南大学経営学部，iwatsubo@kjo.setsunan.ac.jp

専門としている人向けの感がある。

第二の分類は、金融政策とマクロ経済の記述が後段に位置し、前段には金融システムやファイナンスなどマイクロ経済的視点が位置する教科書である（表2、マイクロからマクロ型）。手元にある限りで藤原・家森（2002）が初期のものとして挙げられる。藤原・家森（2002）は自著を初級と位置付け大学生を読者層と見なしているようだが、“はしがき”を見る限り、広く一般社会人も含んでいるように見受けられる。そして、金融には「分かりにくい、難しいという印象」が一般にはあり、その原因をカバー範囲が広いというだけでなく、抽象論の理解に備えた一定の予備知識（経済学や数学）や金融の制度的な仕組みの知識が不足している点に求めている。

第三の分類は、本書を含む一連の家森氏著書である（表3、マクロからマイクロ型）。家森（2019）の章構成は金融政策やマクロ経済に関する記述が前段に集中し、他に類を見ない独特の構成である。さらに、著者の教科書に対するポリシーの原点とも言えるのは1999年の著書と思われ、まずは家森（1999）に遡って見てみる必要もあるのではないかと思う。

生活者目線が原点

家森（1999）の“はしがき”（p.1）には、自身の大学1年生向けの講義や市民講座などの経験に触れ、「学生諸君や市民の方々が金融問題について強い関心を持っているが、同時に金融は難しいと感じてもあるようであった」とし、「それは、金融問題を理解するためには、経済理論や金融理論だけではなく、金融制度に関する知識や正しく統計を読む力など、幅広い学力が要求されるからであろう」と述べ、1990年代の金融環境の変化により、教科書といえども学生以外も対象とするようになったという点で第二の分類（補論表2）の教科書群と同様の問題意識を持っている。

注目されるのは、「これまでいわばプロの目線で金融を考えがちであったが、本書を執筆することで生活者の目線で金融をみることの重要性（と難しさ）をあらためて感じる事ができた」と述べている点である。ここで特に目を引くのは、その対象者で、「生活者」という表現である。さらに本書の目的として、「生活者として（中略）自らの金融判断を行うための基礎学力の育成に主眼」があるとまで記述している。当書のタイトルに“教養”とつけていることからして出版物としては当然と言えばその通りである。だが、強調すべきは、これまで行政が支えてきた金融界が激変し、どちらかと言えば蚊帳の外にあった「生活者」でさえもが、語弊を恐れず言い換えれば「市井の老若男女」さえもが金融を知り自らが対処する必要性が出てきた、というのが家森（1999）の考え方である。時代背景が著者をして生活者目線に向けさせたのは間違いのないであろうし、補論でも述べたように、著者の一連の教科書の章構成はほとんど変わっていないことからして、生活者目線が氏の原点にあるのではと

想定しておくのも自然であろう。

実は、こう構えておくと、本書、家森（2019）の意図もより分かり易くなる。

本書の構成と内容

第1章では、金融論の主な研究テーマとして、金融政策、金融システム、資金運用・調達（ファイナンス）、国際金融であるとし、本書の中心的なテーマを「金融政策」と「金融システム」とする旨の記述がある（p.28）。第2章では、貨幣の役割（機能）を挙げ、役割に沿った各種貨幣の定義を行う。また、決済手段としての暗号資産（仮想通貨）や資産運用との関係からロボアドバイザーにも指摘が及ぶ。第3章では、単利や複利の説明に始まり、金利の期間構造を含む利子率の決定要因や債券価格と利子率の関係の説明がなされる。また、金利決定の場としての金融市場の説明が付加される。この3つの章は次のマクロ金融政策を理解する上での最低限必要な知識と位置付けられる。

マクロ金融政策は3つの章で構成され、理論的説明ではIS-LMモデルを用い、物価が硬直的な短期に限定されている。ただし、実際の現象面の説明には長期的視点が含まれ、入門書としてはかなり専門的な内容が扱われている。第4章ではIS-LMモデルの簡単な説明の後、金融政策の基本的な枠組みについて述べられている。また、効果波及メカニズム、ルール対裁量の問題、インフレ・ターゲットの論点が整理されている。第5章では、視点を長期に移し、実際的な観点から金融政策の第一目標を物価安定にあることを挙げ、日本銀行の存在意義や金融政策の課題について説明されている。入門書としては特異と思われるのが、金融政策の3つの政策手段を元に展開される第6章である。例えば、重要性の低下した公定歩合操作に対して導入されたロンバート型貸出制度の説明や、同じく預金準備率の重要性低下の理由を海外の事例を引き合いに説明するなど、学生向けというよりも、経済環境の変化を肌身で感じ取っている社会人や生活者に向けたメッセージと受け取れるような説明がなされている。その上で、現在の政策当局の残る手段である公開市場操作について、運営の仕方や経過、困難さが丁寧に解説されている。

第7、8章は金融システムを支える金融機関に関する説明である。金融システムの機能や間接・直接金融、貨幣供給・信用創造、銀行の種類や業務、銀行の抱える問題点、メインバンク制度・リレーションシップバンキングの説明が第7章にて、また第8章では、信金・信組やJA、証券会社や保険会社、証券取引所など金融システムを支える機関の説明がなされている。

第9章から第11章では、金融システムの安定化に関わる施策・規制の説明がなされている。第9章では、金融機関破綻の予防的観点からプルーデンス政策が説明され、事後的な対応策が第10章で扱われている。特に注目されるのは第11章である。本章は金融市場に関する規制

が扱われているが、力点は消費者保護にある。例えば、第7節では金融商品販売法や消費者契約法、金融トラブルへの対応などを解説し、生活者向けの基本的な金融リテラシーに関する事項まで取り扱っている。

第12章では、銀行預金や郵便貯金、保険、公的年金について、第13章では株式などリスク資産に関する説明がなされている。ただし、金融商品の単なる羅列的説明ではなく、冒頭で金融経済教育や金融リテラシーの重要性を指摘し、行動経済学を引用しながらリスク資産である確定拠出年金の必要性も説いている。

第14章では、資産選択理論や企業金融理論の初歩的な解説に加え、欧米を中心に盛んになりつつある ESG 投資にも言及している。

初版と本書第二版との違い

新たな章の設定はないが、データのアップデートに加え、第2章第5節「新しい貨幣」、第6章第5節「量的・質的緩和政策」、第7章第4節「日本の銀行の課題」、第11章第7節「金融における消費者保護（特に7.4項「金融トラブルへの対応）」、第12章8節「年金」、第14章5節「社会的な課題を解決する金融」の各箇所、加筆や改訂が行われている。初版の家森（2016）から2、3年ほどしか経っていないが、加筆・改訂作業は多大なものとなっている。

本書の評価

書評と銘打っているからには評価をせねばならないが、教科書の良し悪しは読者層に加えて、教員の使い勝手も考慮せねばならず、いざ評価となるとなかなか難しい。したがって、ここでは筆者の使用事情に基づく評価とさせていただきたい。

日頃、本書は経営学部2年生前期の講義に用いており、学生は経済学を殆んど知らない部類に入る。ただし、昨今は情報源が多様化し、特にSNSを通じて暗号資産やFX、株式に興味を持つようになったり、実際に取引をしている者までいる。また、件の年金不足の報道に驚くような者も少なからずいる。

筆者はそのような学生を相手として、（金融に関しては）“自主防衛”のストーリー仕立てで講義に臨んでいる。つまり、こうだ。20年を超える景気低迷や低金利の原因がバブル経済の崩壊にあり、主として超低金利を理由として“学生諸君は損している”と強調し、関心を喚起する。次いで、この間、そもそも政策当局は何をやってきたのか、無策だったのか、いやそうではない、できることはやってきたし、金融政策にも限界がある。したがって自分の身は自らで守るしかないというストーリーである。

このようなストーリー仕立ての講義では、本書は実に使い勝手が良い。抽象度が高い故に

初学者には少々分かりにくいマクロ経済学の議論を厳選・圧縮し、マクロ経済学と金融政策の章を前段に配置することで、関心の低下を最小限に抑え、後段のミクロ的で身近で比較的分かりやすい金融事象の説明に結び付けられるからである。

また、本書の価格や作りも嬉しい。版元の事情だけでなく昨今の教育事情からも学生には教科書を購入させる必要があるものの、経験から推すに3000円・300頁を超えると、どうも購入率が落ちる。厚みがあり重くなると、学生にとっては購入を躊躇するきっかけになってしまうのである。本書はこれらの条件を的確にクリアしていると思う。

もちろん難点もある。誤解の無いよう先に言えば、著者に加えて教員にとっても改訂や準備に時間がかかるという点である。繰り返しになるが、本書の視点の原点ともいえるのは生活者目線にある。したがって生活者の多様なニーズに応えるべく、理論や学説史の代わりに現状の詳細な制度や仕組みの説明が大部分を占める。このため、教える側にとっては制度の改変を追ったり、仕組みに関する経験値が（ある程度）求められる。例えば、学生にとってもハードルの低いFX取引では現状25倍のレバレッジが掛けられるが、倍率に関しては引き下げられる可能性もあると聞いている。さらに、レバレッジの怖さを教えるだけではなく、資金管理などの重要性を説く必要があると思うが、これは現状では教員の（筆者の知る限りでは学術的ではないという意味で）経験値に依存していると言わざるを得ない。著者にとっても教員にとっても金融事象に関する知識や経験のアップデートが常に求められるのである。

おわりに

金融界は、ここ30年の間に激流に飲み込まれ、生活者も金融に関心を寄せるようになった。筆者も以前に税金からなぜ銀行だけを助けるのかという質問をいただいた経験がある。本書は、そういった生活者の視点を原点とし、多様な金融知識のニーズに巧みに応えようとする金融論の入門的な良書だと思う。

本書の章構成は独特ではあるが、金融政策に関する3つの章が前半に置かれているため使い勝手も良いと思う。つまり、金融政策の章を最後に持ってきてもなんら問題もないし（逆に仮に後半にあった場合、前半に持ってくる時には注意を要する）、また、金融リテラシーの教科書として使うこともできる（場合によっては金融政策の章を割愛しても良い）。もちろん、学生だけでなく、一般の生活者・社会人の方々にとっても読みやすいであろう。是非とも一読されることをお勧めしたい。

補論

金融論は貨幣論や銀行論の影響を強く受けている。したがって、伝統的な構成は凡そ次のようなものではないだろうか。まず、貨幣の機能・役割の説明から始まり、給付と反対給付とに時間的ず

れがあるという意味での信用に関する記述（銀行を筆頭とする金融機関や金融市場の説明など）が続く。次いで、金融論の最終目標にして難関の金融政策が閉鎖・開放マクロ経済モデルを使って論じられる、というものである。

さらに、金融政策がマクロ経済モデルをベースとしているため、全般的にマクロ経済学との重複部分が多くなる。マクロ経済学が初学者にとって分かりやすいものか否かについて、意見は分かれると思うが、筆者のこれまでの経験からすると（例えばミクロ的な需要に比べて）マクロ経済事象は必ずしも身近なものではなく、実際に手に取って見ることが難しい分、取っ付きにくい感はある。

そこで、以前から手あたり次第に購入した教科書を元に、章を基準として、独断と偏見で次のような表を作成した。難易度は無視して発行年順に並べ、次のような基準で3つに分類した。貨幣の機能、金融市場や金融機関、企業金融や家計の金融活動の記述のある章はできる限りミクロ経済的な章として扱い、それ以外は原則的にマクロ経済的章として色付けた。また、マクロ経済的記述の分布を元に大まかに、マクロ経済の記述が広く分布しているもの（表1）、後段に寄っているもの（表2）、前段に寄っているもの（表3）の3つに分類した。

手元にある最も初期の堀内（1990）は表1に属し、マクロ経済モデルに関する説明が広く分布している。筆者も院生時代に用いた教科書である。堀内（1990）はその“はしがき”で、「実のところ金融に固有の理論など存在しない」（p. ii）と述べており、その内容がマクロ経済理論の記述を中心としているのにも頷ける。それら記述の合間に金融市場や金融仲介機関、企業の金融といったミクロ経済的説明が挿入されている。およそ伝統的な章構成の教科書と見なして良いであろう。

もちろん、堀内（1990）はマクロ経済の記述のみで良しとしている訳ではない。“本書のねらい”の節で、「金融の世界はここ10数年の間に急激な変化を遂げてきた。（中略）その変化の本質は、（中略）金融取引に関わる情報の問題など、ソフトな側面の変化に金融の構造的な変化の本質を見るべきである」（p. ii）とし、ミクロ経済理論で扱う情報の経済分析の重要性を指摘している。後の岩田（2000）、内田・西脇（2002）、吉野・高月（2003）、岩田（2008）、藪下（2009）、植田他（2015）もマクロ経済的記述が広く分布する一方で、情報の経済分析を中心としたミクロ経済理論の記述が挿入され、その分量も年代が新しくなるほど多いように見受けられる。

一方、金融政策やマクロ経済の記述を思い切って後段に位置付けた書籍群も現れた（表2）。手元の文献では藤原・家森（2002）が初期のものとなる。その“はしがき”には、「書店の店頭では、「金融破綻」や「崩壊」「再生」といった刺激的なタイトルのビジネス書に加えて、「億万長者になる方法」「株で儲ける方法」といった利殖関係の本や雑誌をよく見かけ」とあり、これは経済の先行きや老後の生活設計に対する不安感や自己防衛意識を反映していると推測している。その一方で、「金融は分かりにくい、難しいという印象も強い」とのいわば教える立場としての苦悩も吐露する。その原因は、「①金融論のカバーする範囲が多岐」、「②経済学や金融工学など数学を用いた抽象的な理論が多く、理解するためには一定の予備知識が必要」、「③金融はすぐれて現実との関わりが強い分野であり、金融の制度的な仕組みについても知識が不可欠」と指摘している。その結果、彼らの著書では、堀内（1990）が示唆したのと同様に、新たに登場してきた情報の経済学を中心としたミクロ経済的記述を増やし、それらを前半に位置付けている。思うに金融システム論に近い構成ではあり、当時の一般の人々にとって関心の高かったであろう株式・社債市場、徐々に知られるようになっていたデリバティブなど、より現実的な記述を前半に位置づけ、学生や一般の人々で

表 1 伝統的な章構成の教科書

著者・編者	堀内昭義	岩田規久男	内田滋・西脇廣治	吉野直行・高月昭年	岩田規久男	数下史郎	植田宏文・丸茂俊彦・ 五百旗頭真吾
著者数	1	1	10	14	1	1	3
タイトル	金融論	金融	現代経済学のコア 金融	入門・金融論 第2版	テキストブック 金融入門	金融論	エッセンシャル 金融論
出版年	1990	2000	2002	2003	2008	2009	2015
出版社	東京大学出版会	東洋経済新報社	勁草書房	有斐閣	東洋経済新報社	ミネルヴァ書房	中央経済社
頁数	380	435	241	408	259	278	250
価格 (Amazon 掲載)	2860	-	2916	-	2200	3850	2860
難易度/想定読者層	中級	基礎から中級	大学生、一般社会人	(恐らく初級)	入門 (初級)	中級	中級
章立て (章数)	12	15	10	9	10	12	9
第1章	貨幣の機能	貨幣とその貸借	中央銀行と金融機関	資金循環と金融	貨幣と決済の仕組み	貨幣と金融	金融の基本的機能
第2章	貯蓄・投資と金融取引	日本の金融構造と金融構造	日本の金融構造と自由化・国際化	日本の資金の流れ	銀行による貨幣の供給	貨幣供給と銀行システム	信用創造とマネー・ストック決定メカニズム
第3章	金融市場と金融仲介機関	資金の循環と金融市場	金利・資産価格と金融市場	財政投融資	貨幣と金融取引	貨幣の保有動機と需要	マクロ金融理論
第4章	貨幣供給のメカニズム	金融仲介と企業金融	ファイナンス理論	証券市場の拡大	直接金融の仕組み	資産選択の理論と資産需要	金融仲介と金融システム の安定性
第5章	マクロ経済学の出発点 —貨幣数量説—	貨幣の供給	貨幣需要	金融技術の高度化	間接金融の仕組み	金融市場と資産価格	企業金融
第6章	ケインズ理論の金融的側面	金融規制と金融システムの安定性と効率性	貨幣供給	金融環境の変化と金融行政	金融市場と金融資産	総文出・投資とファイナンス	金融資産価格の決定
第7章	企業の投資と金融	利率と資産価格の決定	マクロ経済と金融政策	貨幣とは何か	リスクと金融制度	失業・インフレーションと金融政策	金融リスクとデリバティブ
第8章	短期マクロ経済モデル—IS・LM分析—	金融とマクロ経済の均衡：IS-LM分析	合理的期待と政策の有効性	金融のミクロ理論	金利と資産の価格	市場の失敗と貨幣経済	外国為替と為替レート
第9章	インフレーションと失業の變動	貨幣と物価および産出量の變動	国際マクロ経済と国際取引・為替レート	金融のマクロ理論	金利・資産価格と経済行動	非対称情報と金融市場	開放経済のマクロ金融理論
第10章	金融・資本市場の諸問題	不確実性下の企業投資と企業金融	国際通貨制度と国際経済政策	経済の變動と金融政策	経済の變動と金融政策	リスク市場の不完備性と非対称情報	
第11章	為替レート決定のメカニズム	デリバティブの仕組みとリスクの移転				金融仲介と銀行システムの安定性	
第12章	開放マクロ経済のモデル	情報の非対称性と金融政策				グローバル化とインテリジェントな国際資本移動とインフォーマル金融	
第13章		銀行行動の理論と金融政策					
第14章		国際金融の仕組み					
第15章		金融と為替レート					

表2 ミクロからマクロ型章構成の教科書

著者・編者	藤原賢敏・家森山吉	池田和久	黒田晃生	大野広治 他	真田文彦	吉田真理子・大野山岳	藤江謙輝・石川洋子	内田尚史
著者数	14	5	7	7	1	2	2	2
タイトル	金融論入門	入門 金融論 第4版	金融論	金融論 第3版	基礎コース 金融論 第3版	はじめての金融論	テキスト 金融論	金融
出版年	2002	2004	2007	2007	2011	2011	2012	2016
出版社	中央経済社	ダイヤモンド社	有斐閣	有斐閣	サイエンス社	中央経済社	有斐閣	有斐閣
頁数	224	301	280	307	307	241	352	372
難易度(想定読者層)	288	3980	2700 (第5版)	2880	-	2808	2582	3740
難易度(想定読者層)	初級	社会経験のある人	学生、社会人	中上級	-	入門(初級)	初学者から実務家まで	初級から十分理解している人まで
章立て(章数)	15	5	12	16	10	26	30	14
第1章	金融市場の基礎知識	インテロダクション	金融の基本的な機能	リターンとリスク、最適、相関	貨幣と金融	金融の役割	金融の役割	貨幣と決済
第2章	金融市場の基本概念	資産価値	企業の需要とポートフォリオ選	証券市場	日本の金融システム	金融の方法と金融市場	金融機関の機能	金融とその機能
第3章	銀行の金融活動	金融市場	企業の投資と資金調達	ファイナンスの理論	金融機関の機能と証券化	貨幣	通貨の役割	取引信用とリスク
第4章	企業の金融工学	金融機関	金融市場とアルターナティブ	コーポレート・ファイナンスの基礎	金融市場	日本の銀行	資金の決済	情報の非対称性と返済のリスク
第5章	金融工学の基礎	金融政策	金融システムとリスク配分	最近資本構成の理論とエイジェンシー問題	金利と資産価格	日本の金融機関	金融資産のリターンとリスク	金融の仕組み (1): 流動化、証券化、信託生産
第6章	デリバティブと金融工学	金融政策の目的と手段	金融政策の目的と手段	コーポレート・ファイナンスの発展	金融派生商品	預金通貨と信用創造	金融商品の価格	金融の仕組み (2): 担保、保証
第7章	金融仲介の理論	短期金融市場と日本銀行の金融調	金融仲介の基礎理論	金融仲介の基礎理論	家計の金融行動	信用家数	金融市場の役割	金融の仕組み (3): 分散化
第8章	わが国の銀行	預金・貸付市場と信用創造	金融システムの変遷	金融システムの変遷	企業の金融行動	信用家数	金融取引と金融システム	金融機関 (1): 金融仲介機関
第9章	わが国の金融サービス産業	債券市場と信用創造	貯蓄・投資と資金循環	貯蓄・投資と資金循環	債券価格と投資収益率	債券価格と投資収益率	債券市場の特徴	金融市場
第10章	公的金融	株式市場とバブル現象	資金循環動態と資金循環分析	資金循環動態と資金循環分析	株式市場とバブル現象	株式市場とバブル現象	株式市場の特徴	金融機関 (2): 金融仲介機関以外の金融機関
第11章	グローバル金融工学	外国為替市場と対外均衡	金融政策のフレキシビリティと運営戦略	金融政策のフレキシビリティと運営戦略	外国為替市場と対外均衡	家計の金融行動	金融市場の効率性	資金循環と金融システム
第12章	マクロ経済の諸指標	金融派生商品市場とリスク配分	中央銀行とマネーサプライ	中央銀行とマネーサプライ	企業の金融行動	企業の金融行動	証券化商品市場	金融政策と経済の長物面・金融
第13章	マクロ経済の理論	マクロ経済の理論	金融政策の分析	金融政策の分析	為替レートとは	為替レートとは	金融派生商品市場 I: 実物	金融システムの問題と金融危機
第14章	中央銀行と金融政策	中央銀行と金融政策	国際金融の基礎	国際金融の基礎	マクロ経済学の基礎概念	マクロ経済学の基礎概念	金融派生商品市場 II: オプション	金融制度と公的介入・ブルームズ政策
第15章	わが国の金融政策	わが国の金融政策	国際金融の現状	国際金融の現状	国民所得の決定	国民所得の決定	金融派生商品市場 III: スワップ	
第16章			国際金融の発展	国際金融の発展	国民所得と相子率の関係	国民所得と相子率の関係	外国為替市場	
第17章			国際金融の発展	国際金融の発展	貨幣の需要	貨幣の需要	企業債と収益・財務構造	
第18章			国際金融の発展	国際金融の発展	国民所得と相子率の関係	国民所得と相子率の関係	投資活動と資金調達	
第19章			国際金融の発展	国際金融の発展	財政政策と金融政策の効果	財政政策と金融政策の効果	不完全な資本市場	
第20章			国際金融の発展	国際金融の発展	物価と国民所得の決定	物価と国民所得の決定	企業と金融機関の関係	
第21章			国際金融の発展	国際金融の発展	インフレ率と総供給・総需要の関係	インフレ率と総供給・総需要の関係	企業と投資ファンド	
第22章			国際金融の発展	国際金融の発展	短期および長期均衡と金融政策	短期および長期均衡と金融政策	銀行業の特性	
第23章			国際金融の発展	国際金融の発展	開放経済における国民所得の決定と乗数効果	開放経済における国民所得の決定と乗数効果	銀行業のリスク	
第24章			国際金融の発展	国際金融の発展	為替制度と為替介入	為替制度と為替介入	信用リスクと市場リスクの管理	
第25章			国際金融の発展	国際金融の発展	マネーサプライ・ミニマム・モデルと為替制度および為替介入	マネーサプライ・ミニマム・モデルと為替制度および為替介入	信用リスクと市場リスクの管理	
第26章			国際金融の発展	国際金融の発展	日銀の金融政策	日銀の金融政策	国際的な危機	
第27章			国際金融の発展	国際金融の発展	中央銀行と金融政策	中央銀行と金融政策	国際的な危機	
第28章			国際金融の発展	国際金融の発展	金融政策と派生市場	金融政策と派生市場	中央銀行と金融政策	
第29章			国際金融の発展	国際金融の発展	金融政策の行効性	金融政策の行効性	金融政策と派生市場	
第30章			国際金融の発展	国際金融の発展	経済環境の変化と金融政策	経済環境の変化と金融政策	金融政策の行効性	

表3 マクロからマイクロ型章構成の教科書

著者・編者	家森信善	家森信善	家森信善幸	家森信善
著者数	1	1	1	1
タイトル	教養としての金融知識	はじめて学ぶ金融のしくみ 第3版	ベーシックプラス 金融論	ベーシックプラス 金融論 第2版
出版年	1999	2011	2016	2019
出版社	中央経済社	中央経済社	中央経済社	中央経済社
頁数	168	271	244	256
価格 (Amazon 掲載)	—	2592 (第4版)	—	2420
難易度/想定読者層	生活者, 市民, 初学者	学生, 市民	初学者, 学生	初学者, 学生
章立て (章数)	5	14	14	14
第1章	日本の金融の現状を理解するための基礎知識	金融論で何を学ぶか	金融論で何を学ぶか	金融論で何を学ぶか
第2章	マクロ金融政策	貨幣	貨幣	貨幣
第3章	金融システム	金利	金利	金利
第4章	金融市場と金融商品	マクロ経済と金融政策	金融政策のためのマクロ経済学	金融政策のためのマクロ経済学
第5章	ファイナンスの基礎理論	マクロ金融政策と日本銀行	金融政策の課題と日本銀行	金融政策の課題と日本銀行
第6章		日本の金融政策	金融政策の基本手段と新しい展開	金融政策の基本手段と新しい展開
第7章		金融システムの役割と日本の金融システムの特徴	金融システムと金融仲介機関の役割	金融システムと金融仲介機関の役割
第8章		金融仲介機関の役割と日本の銀行	銀行以外の金融機関	銀行以外の金融機関
第9章		銀行以外の金融機関	金融システムの安定化のための政策	金融システムの安定化のための政策
第10章		金融システムの安定化のための政策	金融機関の破綻への対応策	金融機関の破綻への対応策
第11章		伝統的な金融商品	金融市場に関する規制	金融市場に関する規制
第12章		市場性の金融商品	間接金融型の金融商品	間接金融型の金融商品
第13章		代表的な金融市場	直接金融型の金融商品	直接金融型の金融商品
第14章		ファイナンスの基礎理論	ファイナンスの基礎理論	ファイナンスの基礎理論

もステップアップしやすいような工夫がなされている。見方を変えると、金融政策の議論は分かりにくいということであろう。同様の構成の書には、池尾 (2004)、黒田 (2006)、大野他 (2007)、晝間 (2011)、吉田・大野 (2011)、堀江・有岡 (2012)、内田 (2016) がある。便宜上、ここでは、表2のような章構成の教科書をマイクロからマクロ型章構成の教科書と呼ぶこととする。

一方、今回取り上げた家森 (2019) は、金融政策やマクロ経済に関する記述が前段に位置しており、表1、2の教科書群とは異なるものとなっている。遡って見ていくと、本書の前著である2016年初版は同じ章構成であり、2011年著書も多少の章の入れ替えや加筆はあるが大きな変化は見られない。なお、2011年著書タイトルには「金融論」と銘打っていないものの、第1章のタイトルを見れば明らかに実質的に「金融論」を扱っている。

こう考えると、家森氏の教科書ポリシーの原点は1999年の著書にあると思えてならない。事実、2011年著書の“はしがき”には1999年をベースにしているとの記述があることから明らかである。つまり、一般的な「金融の教養知識」を扱った1999年の著書を2011年に実質的に「金融論」にするため貨幣の章を加えたが、家森氏の教科書に対するポリシーは1999年の著書を継承していると解されるのである。こう考えると、恐らく、本書の家森 (2019) を正しく理解するためには、初期の著書である家森 (1999) にも触れておく必要があるのではないだろうか。なお、表3の家森氏の一連の章構成をマクロからマイクロ型と呼ぶこととする。

注

- 1) 貨幣機能の論点をミクロ経済に分類したのは後の議論を分かりやすくするための便法である。金融論にとって貨幣と金融政策はセットであり、一般に貨幣機能の論点は貨幣需要・供給に続くためマクロ経済に分類すべきである。しかし、金融論にとって必須の貨幣機能の論点は、前の方に位置する傾向が強く、これをマクロ経済とすると、後述の議論が読者に伝わりにくくなるのではと危惧した。したがって、敢えて貨幣機能の論点をマクロ経済から外した次第である。